

な。「練習した分、タイムが縮まるんだも。」おれだって、練習すつと選手になれつぺ。「一本のタスキつて、カッコいいべした。」と、それぞれに駅伝の魅力を感じている。

「ふくしま駅伝に出て、テレビに映るんだ。」区間賞取んだ。「只見駅伝に出つと、Tシャツもらえんだべ。」
「先生だってその年して走つてんだから、おれだってできつぺ。」と、それぞれの思いを話しかけてくる。

記録会や選考会では、「おれに勝つたらAチームだ。ふくしま駅伝の選手だ。」まだまだ負けてられつつか。」

と、大見栄を張つて先行するもの……。なにせ、生徒は伸び盛り、私は……。生徒たちは、本当にまじめに、一生懸命練習をする。家に帰つてから自主トレをする子もおり、陰の努力の大切さも知つている。そんな駅伝好きの人間の生徒たちとともに、私は、今日も走る。

はな

笹川 憲子

「花がすき。」花屋の店先に並んでいる華やかな花も嫌いだはないがどちらかという、控えめな山野の花

今年の郡大会は、本校が会場で、新しいユニホームも購入。男女アベック優勝だ。」と、全員がはりきつている。また、ふくしま駅伝でも、「総合五十位以内、村の部入賞だ。」区間〇〇位以内だ。「絶対選手になるぞ。」と、頼もしい限りである。

私も、一昨年、あこがれのふくしま駅伝に初出場した。生徒から受け取つたタスキを、次の生徒に手渡ししたときの感激が、今もよみがえつてくる。昨年は、ブレーキになつてしまったので、「今年こそは」と、心に秘めている。

生徒の目標は、昨年、田村高校駅伝部主将を務めたM先輩に、「追いつけ、追い越せ」である。私の目標はといえば、生涯スポーツとして、生徒たちと走り続けることであり、ライバルは、その生徒たちである。

(南郷村立南郷中学校教諭)



が好きである。でも、年に一度くらいは店先の花も飾りたいと思う私は、花を区別して言わないでいる。

そんな私が一番気になつていいる花は、近所の塀際に咲く「シロスミレ」である。タチツボスミレの紫もいいけれど、希少価値からかシロスミレに愛着がある。スミレの類は簡単に交配されるそうで、シロスミレも程なく姿を消すのだから。在来種は外来種に侵食されるらしい。ニホンタンポポも近くではなかなか見られないが、先日、シロバナタンポポに出会い、「どうか来年も」と祈りたくなつた。

家の小さな庭に花があつたし、華道を習つていたので、花は身近にあつたが、何気ない山野の花がいいと思うようになつたのは、教員としてのスタートを切つた南会津での生活が大きい。

教員住宅の裏には、山から流れ出た清らかな小川があり、初夏のころには、水芭蕉がすぐ間近で見られた。ホウノキの枝先に咲く黄白色の大きな花も見ることができた。

写真でしか知らない花を、すぐ傍らでみることができた。

花との出会いは、たいてい突然であつたが、ミヤマオダマキとの出会いもそうであつた。檜枝岐での研究会の帰り道、天気がよくからと歩いて帰る道の熊笹のなかに、ひっそりと咲いていた。「見つかつてしまつた。」といつてるようにも見えた深い赤紫色が、鮮やかに思い出される。

もう一度見てみたいと思うが、なかなかえられない。

オキナグサは、深い林を抜けて、突然に開けた草地にあつた。薄暗い林の中の光が、眩しくなつたとき、やはり、突然に目に入つてきた。オキナグサもミヤマオダマキと似て、赤紫のピロイドのような色だつた。

早々と花びらを散らせた花は、やわらかな翁の髭のような白い長毛を風に揺らせていた。オキナグサは群生してはいたが、やはり慎ましやかに咲いていた。

桃色のイワカガミは薄暗い林の中の岩の影で、かくれんぼをしていて鬼を待ち兼ねていたような様子を見せて咲いていた。愛らしい花である。

夏の日に見たナツスイセンや田の畦のクリンソウ、春浅い日の福寿草など、どれもこれも控えめながらしつかりと自己主張していた。

ゲンノショウコやドクダミ、ハコベの花まで、目を近付けて見ると美しいものである。「雑草の花まで美しいと思う気持ちは分からぬでもないが、家の周りまで……」という騒々しい家族の声を、私は遠くの方で聞いている。

(県教育庁義務教育課指導主事)